コーヒーブレイク

高野山

朝倉　栄造
Eizo Asakura

「高野山」は、日本仏教における聖なる地として広く知れわたり、２００４年（平成１６年）には「紀伊山地の霊場と参詣道」として、ユネスコの世界遺産に登録された。私に特別深い信仰心があるわけではないのに、高野山は何故か身近で親しみがあって魅かれる所である。それが何なのか振り返ってみた。

１．高野山との出会い

私は、１９４０年（昭和１５年）長野県最南部の「平谷村」という寒村で生を受けた。小学２年になった時、南アルプスと中央アルプスの谷あいを下る、天竜川沿いの城下町「飯田市」に引っ越した。１９５９年（昭和３４年）大阪の大学に進学し、その生活は学校近くの下宿屋から始まった。下宿の先輩や級友にも恵まれ、意外と早く大阪特有の雰囲気に慣れることができた。

２回生になってからアパート「真砂荘」に移った。そこの同じ１階に住んでいた会社員の青木さんと世間話をするようになった。青木さんは偶然にも同じ長野県で「小諸」出身であることも分かり、同郷のよしみか直ぐに親しくなった。私より五つ年上で、京都の大学を卒業されてから大阪の会社に就職されて２年経ったと言っていた。温厚で面倒見のいい方で、兄弟のように接してくれ「梅田花月劇場」のお笑いや、映画は西部劇や時代劇など観に誘ってくれた。高校時代は「上田城」近くの学校に小諸から電車通学していたそうで、城内にあった資料館を見てから信州の戦国武将「真田一族」に関心を持ち始めたとのこと。私は真田一族のことを正直何も知らなかった。信州人が知らぬとは恥になるよと言われ、私を「真田幸村」のゆかりのある「大坂城」をはじめ、「三光神社」や「安居神社」に連れ出して、真田家の紋どころ「六文銭」の意味とか、「関ヶ原の戦い」、「大坂・冬の陣」、「大坂・夏の陣」、「高野山との関わり」などいろいろ聞かせてくれた。

３回生になろう３月の頃、青木さんから金沢に転勤することになったと聞いた時はちょっとショックだった。急な話であったが、大阪の思い出に「高野山」に行くが一緒に行かないかと誘われ同行させてもらった。「なんば」から電車で随分と時間がかかったように思えたが、最後のケーブルカーが私には珍しく思え印象深かった。駅前からバスで移動して、「奥之院」に行くと言われるままに私は着いて行った。約２ｋｍあるという参道の両側には、戦国武将の苔に覆われた墓碑・供養塔が点在し、樹齢数百年であろう老杉の巨木が天にそびえ、歴史を感じさせる神秘的な雰囲気に圧倒された。多くの武将の墓を興味津々、武将の名をひとつひとつ確かめながら歩いていると「信州真田旧伯爵家累代墓所」を見つけた。青木さんは感激した様子だったし、私も初めて「真田家」を身近に感じた。木々の間には武将から庶民まで２０万基を超す墓碑が並び、高野信仰の篤さをうかがわせてくれる。一日だけの高野山であったが歴

史を実感し、周りの景観の素晴らしさを体感することが出来た。青木さんとは一年程の短い期間であったが、忘れられない思い出を残してくれたことに感謝している。この体験から後に真田幸村をもっと知りたいと、池波正太郎著の「真田太平記」（全１２巻）を読破し、幸村の武勇と知略に満ちた生きざまに感動し大ファンになった。

名村造船所に入社して２年目だった頃、会社主催の「関ヶ原の戦い・史跡めぐり」が企画され、私は直ぐに参加を申し込んだ。大型バス２台の大勢の参加者で、戦いの様子を思い浮かべながらの散策であった。また、東京勤務のとき、１９９４年（平成６年）１２月東京事務所の有志９人で、上田市の「別所温泉」に行き一泊の旅を満喫した。この温泉は真田家の家臣が入湯したとの伝説と、信州最古の温泉で有名である。一日目は、国宝や重要文化財など歴史的建造物を観て回り、宿は民宿、温泉は共同浴場を利用した。二日目は、再建築城された「上田城」と「上田市立博物館」で、真田一族の暮らしと戦歴などの物語をじっくり見学させてもらった。

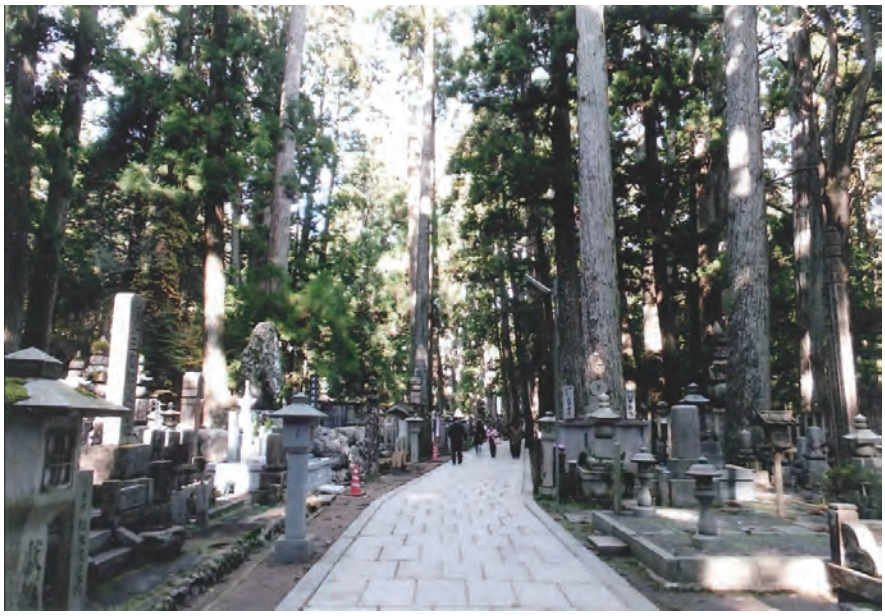

写真１　高野山 奥之院参道

２．高野山と真田幸村

紀伊山地の雄大な自然に抱かれた山上盆地に広がる高野山は、弘法大師・空海が今から約１２００年前に開山した真言密教の聖地である。その中でも「奥之院」は大師入定の聖地であり、戦国乱世を駆け抜けた多くの武将たち、織田信長をはじめ、豊臣秀吉、石田三成、武田信玄・勝頼、そして我が信州の武将である「真田昌幸・幸村父子」が眠っている。上田城防衛戦では徳川軍を退けた父子だったが、関ヶ原の本戦で徳川方に敗れると行き場を失った。

最期の抗戦を覚悟するなか、徳川方にあった幸村の兄・信之の取り成しで、助命嘆願が聞き入られ、降伏。そして父子は高野山への蟄居を命じられた。家族やわずかな供回りとともに父子は、やがて高野山の麓の九度山（くどやま）に居を置いた。蟄居１０年、再度の勇躍を信じていた父・昌幸はついに没する。幸村も老いを嘆く身となるが、そんな彼のもとに大坂城の豊臣秀頼から、徳川との決戦にスカウトされる。九度山を脱出し、長男・大助とともに大坂城に入城。大坂冬の陣で「真田丸」を築き、徳川方に大打撃を与える。翌年、大坂夏の陣が起こり、家康の本陣に突撃するも討死。享年４９歳。幸村の生涯であった。私がなぜ真田幸村に感動したのか。真田家は信州・真田の里を拠点とする土豪で、武田信玄に仕えていたが武田氏が滅亡するや、生き残りをかけて百戦練磨の武将たちを相手に鮮やかな戦いを繰り広げた。その真田家の要となって知略、戦術で覇者・家康をも恐れさせた強さがあったからである。現在、ＮＨＫ大河ドラマ「真田丸」が放送されており、真田幸村ファンにとっては嬉しいかぎりである。

写真２　高野山 壇上伽藍 根本大塔

３．高野山に魅かれて

私は、１９６３年（昭和３８年）４月に名村造船所に入社した。２年後に結婚、大阪工場の近くの中加賀屋の社宅に入居、翌年長女の誕生とその成長に伴い引越しすることにした。利便性が最優先であったのに何故か、南海電鉄高野線沿いにこだわった。脳裏に高野山があったのであろうか。結果、富田林市のＰＬ教団の近くに建設中の住宅公団の金剛団地に入居を決めた。入居は第一次募集の１９６８年（昭和４３年）で、最初の入居者であったため駅から最も遠い団地の奥の棟に入居となった。団地は建設工事の初期段階で、広大な土地は建設中の棟が立ち並び、工事車両や建設機械一色で凄まじい後景が長期にわたり続いた。当時、最寄りの高野線「金剛駅」は無人駅で、ホームには屋根もない田舎の寂しい駅だった。今や団地周辺はニュータウンとして開発され、駅は高野山行き特急「こうや」が停車する大きな駅に変貌している。

入居して間もなく長男が誕生。幼稚園に通うようになった頃から、休日に家族で高野山に行くようになった。高野山は標高約９００メートルあり、夏は涼を求め、秋は紅葉に魅かれて散策するには最高であった。また、ある夏休みに高野山に宿泊しようと計画し、義母・妻と姉・子ども４人の８人連れで宿坊に泊まった。長男はまだヤンチャがしたい頃、騒いで他のお客さんに迷惑をお掛けするのでは

写真３　大伽藍通りの紅葉

と心配していたが、寺院の静かさと厳かな雰囲気の中みんな終始いい子だった。食事は畳敷きの大広間に宿泊者が勢揃い。お膳に盛り合わせた精進料理をいただく。ごま豆腐や旬の野菜など、素材の味を生かしたごちそうは、一品一品が誠に美味で精進料理の味わいに満足した。夜は肌さむいくらい涼しく、近くのみやげ店などを散策し楽しんだ。襖で仕切られた広い部屋に８人が一緒に寝るのは初めての体験で子供たちは大喜びだった。

４．高野山　有縁物故者慰霊法要に出席

名村造船所の「高野山　有縁物故者慰霊法要」に名友会を代表して２０１３年（平成２５年）１１月と２０１５年（平成２７年）１１月の２回、出席させていただいた。毎年、実施されているとのことだったが名友会会長の代理として機会をいただいた。バス停「奥の院前」で降りて、中の橋案内所横の通りを奥之院に向って行くと、間もなく右手に公園墓地が広がる。この公園内は企業の慰霊碑が数多く並んでおり、通りに近い一画に名村造船所の慰霊碑が建っている。この墓地にはロケット型、コーヒーカップ型、「シロアリ安らかに眠れ」などと云った趣向をこらした企業の墓碑が多数あって、今では観光スポットになっているとか。昨年の法要は名村会長様、遺族代表、従業員代表（労働組合・委員長）、名友会代表、事務局の方々の出席で午前１１時から「西禅院　本堂」で、午後１時より「高野山奥之院慰霊碑前」で厳かに執り行われた。創業者「名村源之助」様、夫人「きさ」様が眠っておられる「顕彰碑」の前で、入社当時名村源之助会長が毎日のように現場を回られ「ボルトが落ちている」、「溶接残棒が長い」などと杖の先で指摘されていた頃のお姿を思い浮かべた。私は、現在の名村造船所の「源」を築かれたことへの尊敬の念を抱き手をあわせた。そして有縁物故者の慰霊碑の前で、亡くなられた方々に・・・・合掌。慰霊祭は準備された祭壇に向かい、ご住職の後方に名村会長様はじめ出席者が着席した。澄み切った青空の下、ご住職の読経が流れ、行き交う人々の注目を浴びるなかで法要は粛々と進んだ。このような厳粛な会社の行事に出席させていただき、改めてその意義を知ることが出来た。また、高野山を訪れる人は年々増加の一途だと住職から聞いた。特に外国からの観光客が目立ち、その多さは驚きであった。私はこれからも高野山を尊び過ごしていきたい。

写真４　創業者の顕彰碑と有縁物故者慰霊碑

５．近況・「オカリーナ」

名村造船所４０年、函館どつく４年の職務から解放されたのが今から９年前の２００７年（平成１９年）だった。毎日サンデーのスタートである。同年輩の友人からは晴耕雨読の生活を送っていると賀状や見舞状に書かれている。悠々自適の生活で羨ましく思えるが、私の気性ではとても退屈のように見えて我慢できない。スタートからゴルフを月２～３回はやろう、ウオーキングは１時間を日課にしよう、金剛山にも登ろう、腹筋・腕立てなどで体を鍛えよう、車に頼らず近場は歩こう・・・等々、自分に言い聞かせ、始めてから現在に至っている。若干ペースダウンしているものの一心に体力ずくりに励んでいる。だが、肝心なのは「ボケ防止」である。あれやこれや考えた末「オカリーナ」を習おうとしたのが今から７年前のことであった。きっかけは、２００５年（平成１７年）に高校の同級会を大阪で開催した時、宴会で当時７５歳だった担任の先生が「オカリーナ」を奏で、われわれ教え子に聞かせてくれたことを思い出したのだった。ご高齢なのに「コンドルは飛んでいく」など３曲を見事に披露してくれた。その時、私は強く刺激をうけていた。直ぐに「日本音楽アカデミー」に申し込むと、オカリーナとガイドブック、楽譜集、模範演奏ＣＤなど教材一式が届いた。「オカリーナ」は手のひらの上に乗るほどの、小さな陶器の楽器である。イタリア語で「がちょうの子供」という意味だそうで、現在一般に知られているのは１２穴式オカリーナである。毎日の練習を目標にしてテキストに倣い、始めたところ意外に簡単に吹けるし、優しく素朴な音色にも魅かれこれなら続けられると思った。最初は童謡、唱歌、民謡、歌謡曲など馴染みの曲から習い始めて、徐々にクラシック、ポピュラー、アニメソング、ニューミュージックなど曲の巾を広げて来た。馴染みの曲は、リズムがからだに染みついているせいか練習もスムーズに出来ていたが、最近はリズムと間の取り方が難しくなってきたので楽譜と睨めっこ。「タンタ～ンタタタ」などと声を出して何度も繰り返し、リズムをからだに覚え込ませるのだが、歳のせいか時間がかかりちょっぴり苦戦している。だが、私は生涯オカリーナと付き合っていくつもりである。指を使うのでボケ防止に最適と思うし、楽譜の読み方や初歩的な音楽知識も身につくうえに又、楽しい。これから何か始めようと思われたときは、一度オカリーナを考えられたら如何でしょうか。

写真５　オカリーナ

執筆して頂きました朝倉氏の株式会社名村造船所における概略の経歴についてご紹介します。

１９６３年　４月	株式会社 名村造船所入社
１９８３年　８月	製造本部海洋陸機部工作課長
１９８４年　２月	伊万里営業部海洋グループリーダー
１９８９年　４月	大阪営業部長
１９９４年　７月	鉄構事業部橋梁営業部長 兼 東京グループリーダー 兼 名古屋営業所長 兼 東京事務所副事務所長
１９９６年　９月	鉄構事業部橋梁営業部長 兼 東京グループリーダー 兼 名古屋営業所長 兼 長野営業所長 兼 東京事務所副事務所長
１９９７年　７月	鉄構事業部長補佐 兼 橋梁営業部長 兼 長野営業所長 兼 東京事務所副事務所長
１９９９年　７月	鉄構事業部副事業部長 兼 長野営業所長 兼 東京事務所長